

「この音 なぁに」 ～感じて聴いて楽しめる音楽科の授業～

県立桜丘養護学校
教諭 有村 準子

■ はじめに

本校は、鹿児島市南部の肢体不自由及び知的障害のある児童生徒の教育を行う特別支援学校です。小学部、中学部を設置し、一人一人の特性、能力に応じた教育を進めています。児童生徒の実態に応じて、肢体不自由、知的障害、重複障害に対応した教育課程を編成しています。

■ 中学部（知的障害教育課程）の音楽科の授業の紹介

学習指導要領の改訂により、音楽科の目標については、「音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音楽、音楽文化と豊かに興味や関心をもって関わる資質・能力を育成することを目指す。」と提示されました。

これを受けて、身近な「音への気付き」やその「音への興味・関心を高めること」を通して、主体的に関わろうとする態度を育て、音楽への興味を高め、日々の生活が豊かになることを目指して取り組んだ、授業実践を紹介します。

■ 音への気付き～この音どこから～

学習の始めに、個々の聴覚の活用について確認しました。

「音の違いの聴き取り」では、カスタネットとすず、太鼓とタンブリンなど音質や音の高低が違う楽器を準備し、聴き取りを行いました。2択で選ぶことができる楽器の写真カードを示すことで、表出言語が少ない生徒の意思表示を確認することができました。

また、「いろいろな方向からの聴き取り」で、教師を教室の前後左右に配置し、ランダムに楽器の演奏をすることで、子どもたちの反応を確認し、聴こえ方について一人一人の状況を確認しました。手立てとして、楽器や写真カードを準備し、選択



して意思表示できるようにしました。表出言語が少ない生徒も集中し、聴覚を活用している様子が分かりました。

←【選択用の写真カード】

■ 生活音を聴いて～この音、何の音？～

靴音、おなら、花火、馬、豚など、生活の中で聴き覚えがあるような音を選んで聴き取りの学習をしました。一枚ずつのカードを実態に応じて枚数を変えて提示したり、複数のイラストがランダムに提示されたワークシート式のものを使用したりして、個々の実態に応じた手立てを行いました。

身近な音、自分が知っている音が提示される中で、子どもたちの「次は何だろう？」という期待感が感じられ、意欲をもって取り組む姿が見られました。子どもたちのもっている力を引き出すために、子どもが考えを伝えるための手立てが必要不可欠だと痛感しました。

【枚数を調整して提示できるカード】



↑【イラストをランダムに提示したワークシート】

■ 楽器の聴き分け、リズム演奏へ

子どもたちの「聴く」ことへの集中力や意欲が高まったことを受けて、曲の中で使用されている打楽器の聴き取り、リズムの模倣演奏へと発展させました。聴き取ったリズムを模倣して、CDの曲に合わせて演奏することで、臨場感豊かな演奏体験になりました。また、実態に応じて、演奏する楽器やリズムは難易度を設け、個々の達成感につながるようにしました。

■ 全体目標、個人目標を明確に

合同で授業を行う中で、ST（サブティーチャー）との連携と授業の目標確認を大切にしています。

特にCT（チーフティーチャー）がねらう授業の全体目標と個別の指導計画につながる個人目標については、音楽科の視点から細かく設定し、共通理解を図っています。

■ おわりに

子どもたちは、周りにあふれている様々な音や音楽を、聴き取り、聴き分け、時には苦手な音も感じながらも、自分の生活に取り入れていることが分かりました。これからも実態に基づいた目標を設定し、個々に応じた手立てを準備することで、充実した学習体験になり、成就感を感じられるよう、様々な工夫をしていきたいと思えます。

そして、身近な音への興味・関心を高めながら、子どもたちが進んで音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを感じることができるよう授業を展開していきたいです。